



釈迦堂内の臨時納経所。今春の新納経所完成で1年余りの役割を終える（1月16日）

清水 第二三六号 目次

表紙題字・良慶和上筆 表紙写真・三重塔から洛中を臨む
 (2025年12月19日 撮影・池田勝)

災害列島で感じる四季の美 …………… 清水寺貫主 森 清範 …… 2

大西良慶和上法話『法華経寿量品自我偈』講話 ① …………… 10

清水寺 長臈語り ⑥ …………… 清水寺長臈 森 孝忍 …… 16

五明洞浄墨 津崎矩子筆「若竹のうた和歌短冊」 …………… 23

『四十手深要決義』を読む 第33回 …………… 清水寺執事 森 清顕 …… 24

清水寺領六波羅野の諸相『成就院日記』⑳ …………… 清水寺史編纂委員 野地秀俊 …… 42

「清水寺・古写真館」本堂外陣にも戦時下の標語 …………… 57

清水観音の御分身 相應寺で御開帳 …… 清水寺学芸員 内田 孝 …… 58

「今年の漢字」2025年は「熊」 …………… 68

津軽音羽会、今年も糯米奉納 …………… 70

八代目菊五郎さん親子、音羽の滝をろって参拜 …………… 71

寄託の大日如来、京博で初めて公開 …………… 74

那須で森貫主が法話 詳細パンフも …………… 75

混雑の境内想定、リアルな救命講習 …………… 77

生誕110年「西村公朝」展 …………… 79

安倍昭恵さん 成就院で書展 …………… 81

「西洋人が見た宗教と文化」今年の朝講座 …………… 83

アテルイ・モレ顕彰碑法要 …………… 85

清水寺の登場する本 …………… 87

内外往来 …………… 89

編集後記

災害列島で感じる四季の美

清水寺貫主 森 清 範

二〇二六年の元旦は、最大震度七を観測した能登半島地震から二年を迎えました。石川、新潟、富山の三県では災害関連死を含めて六九八人が亡くなりました。とりわけ石川県では、同じ年の九月に二〇人が亡くなるいたましい豪雨災害も起こったのです。今年も新年早々の一月六日、島根、鳥取の両県で震度五強の地震が起きています。

能登復興、清水寺からも祈る

昨年九月、石川県輪島市商工会議所からのお招きがあり、法話の前に朝市が催されていた場所に立ち寄りました。最近、「ようやく朝市復興の輪郭が見えてきた」との報道もありましたが、昨秋はまだ焼け野原。多い時で二〇〇店舗が並び、歩けないほどの買い物客であふれていた面影はありません。般若心経を誦し、



聞法の人たちに語り掛ける森清範貫主

犠牲になった方々を追悼してまいりました。被災地の復興を願い、清水寺では一昨年に輪島塗の器などを納経所で授与し、私は大阪、名古屋、東



朝市通りで読誦する森清範貫主と全国各地の僧侶。後ろでは輪島塗関係者が手を合わせていた（2025年9月30日・石川県輪島市）

京の百貨店で「輪」「共」「生」と揮毫し、「共生＝助け合い」をテーマに法話をいたしました。若い僧侶は炊き出しなどで何度か現地に入り、被災地の子供さんたちとは清水寺のご案内など交流を少しずつ重ねています。お寺としては、途切れずに何かを続けていきたいですね。今年も四月には、地震で大きな被害を受けた輪島の總持寺祖院を会場とする法話会に伺う予定です。

昨年十二月八日、青森県東方沖で大きな地震が起きました。八戸市の揺れは震度六強でした。半年ばかり前の六月に八戸仏教会に招かれ、東日本大震災犠牲者の法要に合わせて法話と揮毫をしてまいったところです。近くには大学時代の友人が長く住職を務めた寺があり、今は隠居しております。すぐにお顔が浮かぶ八戸仏教会のみなさまも友人も家具が倒れる被害があったと聞いて心配しましたが、幸いにして建物倒壊までは至らなかったとのことでした。

地震、雷、火事、親父。昔から怖いものとして挙げられますね。親父の怖さは近年、落ちてきたようですが、地震は相変わらず恐ろしいですし、火事は

昨年二月頃から岩手県などで大きな山火事が起き、秋には大分市での火災などもありましたね。この一年は各地で火災が目立っているようです。

中国では司馬遷（紀元前二世紀～一世紀）の著した歴史書『史記』、明の時代の一六世紀に成立した百科全書『本草綱目』などに、漢字「蜃」―「しん」と読みますが―はハマグリを意味すると記されています。日本で地震を起こす生き物はナマズとされてきました。中国では「大きなハマグリが大地を揺らすと地震が起きる」と想像してきたのでしょう。大きなハマグリが息を吐くと、幻影も生み出します。これを蜃気楼と言います。

自然感じる夜明け前の境内

自然災害はさまざまに起こります。一方で身近な場所でも日々、私たちは自然を感じていますね。

例えば、日の出前に毎朝、清水寺の境内の御堂を順番に巡って御経を唱えていると、寒ければ冷気に自然を感じます。夜明け前に自然を感じるのには、千年前でも変わりません。平安時代の人々の感覚も同じでしょう。

清少納言は、『枕草子』に四季それぞれで美しさを感じる時間帯を挙げています。よく知られている「春はあけぼの」で始まる一節では、春の夜明けや冬の早朝などに美しさを見出していますね。日本語には時間帯を示す言葉がたくさんあり、完全に朝になる前の少し東の空が明るくなってきた頃を指す「しののめ」は、現代でもとても美しく感じられる時間帯です。朝顔はシノノメグサとも称します。みなさんにもぜひ、夜明け前の美しさを体感いただきたいのです。

宵、夜中、暁と時間は移ります。春、朝と同じように他の季節、他の時間帯でもそれぞれに美しさを感じられますね。ある外国の方から、「秋の夕暮れの清水寺に参拝したい」と言われ、西日の差す頃にご来山いただいたこともあります。大阪の四天王寺さんや清水寺には、西門があります。

気候と仏教の教えは、密接に関わってくるのでしょうか。私は、インドへ行った際に感じたことがあるのです。暑い暑いインドの一日が終わって日がとっぷり暮れると、昼の暑さとは対照的に涼しい夜がやってきます。昼の暑さを思えば、涼しい夜は極楽に思

われ、夕日を思って瞑想する日想観の考え方につながるのでしょうか。

江戸時代後期の歴史家・頼山陽（一七八〇～一八三二年）もまた、好きだった京都の気候に思いを馳せました。幕末維新期に広く読まれた『日本外史』を著した場所は、鴨川のほとり（現在の京都市上京区三本木通丸太町上ル）での自宅の「山紫水明處」と名付けた書齋でした。東山の眺め、鴨川の流れの美しさから、この名前としたのです。京都はほんとうに美しいところなのでですね。私も四条大橋の北側をお寺に向かつて渡った時に、月が東山から上ってきたのを見かけました。夕方で、東山が月の灯りで赤く染まっています。京都の風景の美しさを表す代名詞「山紫水明」を思い出しました。

千年前、紫式部も「おこもり」

一日、あるいは一年を通して明るさや暗さの変化は、今でもお寺では感じる事ができるのです。紫式部も体験した「おこもり」。清水寺の本堂にこもって何日間もお経を唱え、観音様をお願いごとをする

のです。私が「小僧」を務めていた頃、戦後はまだ「おこもり」をする方がいらっしやいました。堀もなく、出入り自由だったのですね。戦後、各地の寺が放火や失火で焼けて大切な寺宝が失われました。清水寺の本堂は国宝で重要文化財の御堂もあります。警察や消防署とも相談して、夜間にはお詣りができないようになりました。それまでは、街頭もない真っ暗闇のお寺でも夜間に散策で入って来られる方々がおられて、時には相手が見えずぶつかったりもしていたようです。

では、『枕草子』二四一段を読んでみます。

清水にこもりたりしに、わざと御使いして賜はせたりし、唐の紙のあかみたるに、草にて、「山ちかき入相の鐘の聲」ことに戀ふる心の數は知るらんものを、こよなの長居や」とぞ書かせ給へる。紙などのなめげならぬも、とり忘れたる旅にて、むらさきなる蓮の花びらに書いてまゐらす。

平安時代はまだ紙がたいへん貴重でしたから、

花びらを紙代わりに手紙を書くこともあったのでしょうか。実際に私も花びらに筆で字を書いてみました。やってみたら書けるのですよ。大西良慶和上も「紙は神」と考えて、紙をたいへん大切にされていました。清少納言は『枕草子』によると、中宮定子からの手紙は色鮮やかな紅唐紙に「いつまでお寺にこもっているのか」と宮中に戻るよう伝えられた際、蓮の花に返事を書いて遣わした、ということですね。

「つとめて」は四季の変化に対応

紙が貴重品で、ろうそくもまた貴重品の時代でした。夜になっても自由に明かりを灯せるわけではありませんせんから、真っ暗闇です。だからこそ、日の出前に次第に明るくなって来る時間帯に感じ入ったのでしょう。「春はあけぼの」に始まり、「冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず、霜のいとしろきも」と、長い冬の夜が明けることへの感慨を書き記したのでしょう。「つとめて」は早朝を示すとともに、四季に対応した時間帯でもあるのだと思います。

四季を表す言葉は、たくさんありますね。昨年秋、

九二歳で亡くなった俳優の仲代達矢さん（一九三二～二〇二五年）は黒澤明監督『影武者』の主演などで知られ、「無名塾」では次世代の俳優を育てられました。ただ鎧を付けて歩くだけのシーンを何度も撮りなおす黒澤監督に応え、歩く稽古を繰り返された、といえます。稽古場には誰よりも早く行って努力を重ねられました。その仲代さんが口にされていたのが「春は青春、秋は赤秋」と報じられていました。中国では「青春、朱夏、白秋、玄冬」と言いますね。東西南北には東⇨青龍、西⇨白虎、南⇨朱雀、北⇨玄武、とそれぞれの守り神がいるとされ、季節と方が位置付けられるのですが、「赤秋」は三十年前に亡くなった仲代さんの妻で女優・脚本家の宮崎恭子さん（一九三二～一九六六年）が作った言葉のようです。仲代さんは、愛妻の言葉を引いて「青い春を過ぎても、燃えて真っ赤になって生きる」との決意を示されて、最後まで俳優人生を燃焼されていたのですね。秋が過ぎると師走です。十二月十二日には毎年、漢字能力検定協会が「今年の漢字」の全国からの投票結果を発表されます。三十一回目となった昨年は、

「熊」が最も多かったのでしたね。全国で熊が人家の近くで出没するようになり、襲われた方が犠牲になる悲しい事件までも起きました。投票結果は当日、漢検の理事長さんから直接、封筒に入った紙をいただいて知ることになります。ニュースやお客さまとして来山された方からの声も参考にして、揮毫の心構え、準備をします。

私の予想は「米」でした。「米」の字で稽古をしていたのですよ。ふだんは座って机の上の紙に書くのに対し、「今年の漢字」は立って大きな筆を使います。これが難しいのです。「熊」では右側の二つの「匕」が、大きな筆の穂先ではうまく書けませんから、草書を選びました。前回の「金」は五回目でしたから、昔の書体を調べて過去と同じにはならないように書きました。工夫をしているのですが、報道を受けて「金には読めない」との電話が寺務所に何本か掛かってきました。いや難しいものですね。

「米」の字には、「農業の神が込められている」と私は考えています。「米」に限らず、それぞれの言葉にはさまざまな意味が込められているのです。



森清範貴主が揮毫した「熊」は一週間、本堂に掲出された（2025年12月16日）

「桜」の場合、さまざまな説があるようですが、「サ」稲の神「クラ」神が座る場所。座」だと思うのです。「サツキ」「サナエ」「サミダレ」など春の季節の言葉には米づくり、稲作のための神様が宿っているのではないのでしょうか。近年の米価高騰もあってか、食卓からの「米離れ」が進んでいると言われますが、米づくりは日本古来の文化であり、神事、カミさんなのです。これ以上の減反政策で米づくりを止めることになると、農家の方は戸惑ってしまうのではないのでしょうか。

日本では古来、神さんを信仰していたところにインド、中国、朝鮮半島をたどって仏教が伝わってきたことは、よく知られています。六世紀の初め頃には、百済からの公式の使節が伝えています。神様がいるのに仏教を取り入れるのか否かで議論や摩擦があったにせよ、取り入れることが決まりました。神道と仏教は仲よく両立したのです。神仏習合は、日本の宗教文化の特徴です。

日本の仏教には、面白い特徴があります。「秘仏」の存在です。ふだんは御厨子の扉が閉まっています。



「津軽音羽の会」では毎年、清水寺に糯米を奉納している。この年の稲刈りも順調だった
(2023年9月16日・青森県平川市)

本尊を拝むことができない仕組みです。清水寺では三十三年に一回の御開帳を七年後、二〇三三年に予定しています。「秘仏」はインドにも中国にもなく、日本の仏教の特徴です。皆さんへの信仰と仏教がひとつになった日本だからこそ「秘仏」なのでしょう。皆さんにはお姿がなく、目では見えない存在です。神事もだいたい夜に行われてきました。戦前には神とされた天皇陛下がお越しになった時は頭を下げました。さまざまな考え方がありますが、神さんは見えないとの考え方が仏教に取り入れられ、「秘仏」が生まれたのだと私は考えています。

奈良時代に「秘仏」の考え方はなく、平安時代に生まれたのではないのでしょうか。奈良・東大寺の大仏さんなどは、御堂そのものが御厨子なのです。一方で、神道でものちには「神像」が出来ていきます。本来は目に見えるものではない神さんが、形になっていきます。神道と仏教がそれぞれの立場から、互いに近づいていったのでしょうか。

西国三十三所をみても、京都には今熊野観音寺さん、六波羅蜜寺さん、六角堂さん（頂法寺）といった

お寺が秘仏です。御扉を開ける御開帳で、初めて仏さんが見えるのです。弘法大師が著した『秘密曼荼羅十住心論』は、人が悟りの境地に達するまでを十の段階に分けて説いています。御開帳によって仏さまの御姿を見て、はっとして自分自身の中にも仏さんのあることに気づくのだ、と言っているのです。

かつて、毘沙門天さんの御姿を見て「亡くなったおとうさんそっくり」との感想を持たれた女性がおられます。清水寺の信徒総代を務められた西村公朝師からは戦時中、召集されていた戦地で見た夢のなかに出てきた傷んだ仏さんから「早く治してくれ」と頼まれ。「無事に母国に戻れたら修理させていただきます」と夢のなかで返答したとの経験をお聞かせいただきました。病気のため中途失明された女性で、まぶたの裏に元氣だった頃に修学旅行で行った三十三間堂の仏さんが見えたため、「どうか消えないで」とお祈りしたとの話もあります。三人の方はいずれも心の中の仏さんと、実際の仏像が一体になったのです。御開帳が、仏様と出会える貴重でありがたい機会だとわかるのではないのでしょうか。